

金田一春彦
■
日本語セミナー
六

正しい日本語

筑摩書房

正しい日本語 目次

正しい日本語	三
日本語は乱れているか	七
日本語教育について	一四
あすの文法教育のために	一四
アメリカの教科書を見て	一五
日本語学校を助けよう	一五
敬愛する先達・友人の思い出	一六
石黒修さんのこと	一六
時枝博士と私	一七
上甲さんのことども	一七

畏友 五十嵐新次郎君を悼む 二六六

池田弥三郎君と私 二六七

*

言語時評 二五五

新平和論 二五六

古典の仮名遣いをどうする 二五七

聴視者の皆様 二五九

機を折る東京人 二六〇

出直せ、機能文法 二六一

このごろはやるもの 二六二

洋々たるかな日本語 二六三

あとがき 二六四

全卷索引

正
し
い
日
本
語

正しい日本語

戦争中、よくラジオから聞こえてくる歌謡曲に「父よあなたは強かった」という題のものがありました。父よあなたは強かった、とはじまって、

兜を焦がす炎熱を

敵の屍とともに寝て

……

と進み、これに勇ましいような、悲しいような、捨て鉢気分の節のついた曲でしたが、ある日、新聞の投書欄を見ると、この曲の歌詞を攻撃している人がいるのです。いわく、

日本人は古来自分の父親に向かっては必ず「父上」とか「お父さま」とかいう敬称で呼んだもので、いきなり「父よ」と呼びかけるような非礼なことではしなかった。また、その父に対して、「あなた」という代名詞を使うこともなかった。「あなた」は、せいぜい自分と同格に近い人に対して使う第二人称の代名詞で、このような言葉遣いをすると……

というようなことが書いてある。私は随分怖い人もいるものだ、こんな人を父親にもつたらよほど言葉遣いに注意しなければいけないだろう、と思いつながら読んで行って、最後の名前を見て、飛び上がらんばかりに驚きました。何と、金田一京助、と書いてあったのです。私の父です。

一般に、私たちは、正しい言葉かそうでない言葉かということには、非常に関心が強いようです。市河三喜博士の随筆で読みましたが、ある英語学者が死ぬばかりになりました。奥さんに何か頼もうとしている。何か持って来いと言っているようだ。が、口もとがはつきりしない。奥さんが察して、「オペラバッグを持って来るんですね？」と聞いた。と、御主人は、苦しそうな息の下から「オペラバッグ、オペラバッグ」と言って、正しい発音を教えられたそうです。

それから、ラジオの「ことばの研究室」という番組で先代の松本幸四郎さんが、文部省の当時の国語課長の釘本久春さんと対談したことがありました。幸四郎さんも、いつになく、相手が偉いお役人とあって、はじめのころは堅くなっていたようですが、時間が切れるちょっと前になると、「一つだけ課長さまにお願いしたいことがございます」と言い出した。釘本さん、「何ですか」と水を向けると、幸四郎さん、「『積もる』という言葉がありますが、私たちはツモルと言っていました、若い人はツモルと盛んに言う。私はあれがいやでいやで、何とか文部省さんで取り締まっていただけませんか」と言う。釘本さんはよく趣旨が飲みこめなかったようですが、時間は迫っている。それほど議論すべき内容でもないと思つて、「承知しました」と答えた。と、幸四郎さんの喜びようは大変なもので、「ああ、これで私は死んでもいい、これが私の生涯の望みだった」と言つて、番組が終わりましたが、そのあと一か月ぐらいで幸四郎さんは本当に死んでしまいました。

市河博士が紹介した英語学者も、恐らくそのあとすぐ亡くなったのではないかと想像しますが、

その学者にしろ、幸四郎さんにしろ、正しい言葉を守ろうとする気持は並々ではなかったことが感じられます。

正しい言葉を守ることは、小さくは日本人のコミュニケーションを円滑に行なうために、大きくは日本というものを失わないために必要なことですが、このような例を見ますと、私が今さら、正しい言葉を守りましょうと強調する必要はないような気がします。きょうは、そういうことより、正しい言葉とは何だろうか、どういう日本語を正しい日本語とすべきかということについてお話ししてみたいと思います。

二

まず注意すべきことは、時によって言葉の正しさについての考えが同じとは限らないことです。東京に国立国語研究所という研究所があつて、ここでは、文部省国語課が打ち出す国語政策の基礎資料になるようなものを集める仕事をしています。何年か前そこで二〇〇〇～三〇〇〇人の専門家にアンケートを出して、こういう言い方とこういう言い方とどっちを正しい言い方と認めたいかという問題を出しました。たとえば、「世界」ということばを、セカイという人と、セカイという人がある。どっちがいいと思うかとやったら、セカイが感じがいいという人と、セカイの方が感じがいいという人とちょうど同じくらいでした。「つまらないと推測される」という意味のことを、ツマラナソーという人とツマラナサソーという人という。どっちを正しいと考えるかとや

ったところが、ツマラナソーが古くからある言い方だと考えた人と、ツマラナサソーという方が古くからある言い方だと考えた人と、これまた半数ずつぐらいいました。専門家の間でもこんな風ですので、正しいことばとは何かという場合、ことばが正しい、正しくないという時の基準にどんなものがあるかということをよく考えておかなければなりません。

どういうことばを正しいことばとするか。第一の基準は、何かの意味で権威をもった言い方です。権威をもった言い方という中にも実はいろいろあります。昔からある伝統をもった言い方、これは新しい言い方に比べて権威のある言い方と見てよいということがまず頭に浮かびます。この古い伝統をもった言い方を条件の〔1〕(a)としましょう。このごろよく日本語が乱れているなどと言われますが、それは、古い習慣に合わない新しい言い方が出てきて、古い言い方と新しい言い方と両方競争している現状を言うことばです。こういうことを防ぐために、なるべく古い伝統的な言葉を守ろうとすること、たしかにそれは大切なことです。

いつか、若い作家が芥川賞をもらいましたが、その芥川賞授賞式の時に、感想を求められたところ、「私は今まで何々賞というものは他山の石ぐらいに思っていた……」とやって攻撃されました。この作家は「他山の石」ということばを、「自分に関係のないもの」ぐらいの意味に理解していたようです。しかし実際は、御承知のとおり「他山の石」というのは、「参考になるもの」というような意味ですね。この作家はこれで物を知らないと言って大分たたかれたようでした。よく、全然おもしろい、とか、てんで面白い、とかいう言い方が聞かれますが、これもよくな

いと言われます。これも古くはなかった言い方だからいけないというわけで、この場合も私のいう[1(a)の基準に照らして批評しているわけです。

外来語はよくこういう場合に問題になります。夏、海水浴場にたくさん現われるパラソル、あれは私などビーチ・パラソルと言っていました。が、考えてみると、ビーチ・パラソルでなければいけないはずで、毎日オリオンズなどと言っています。が、オリオンならギリシャ語ですから、ズはいらないはずで、もし、ズをつけるなら、英語読みにして毎日オライオンズと言わなければへんです。もっともパ・リーグとして西鉄ライオンズと毎日オライオンズがいたのではまずいかもしれない。セ・リーグの方でも阪神タイガースと何とかオタイガースとが試合をしなければいけなくなりそうです。

文字の書き方にもこのようなことがあります。ムボリーなことをするという言葉がある。うっかりすると、「無暴」と書きそうになる。これは「無謀」と書かなければいけませんね。コートーシモンなどという。「口答……」と書きたくなりますが、「口頭試問」と書かなければいけません。「芥川賞のジュ賞式でジュ賞者は……」というのが難しい。「ジュ賞式」の方は「授」、「ジュ賞者」の方はもらうのですから「受」の字を書くことになります。こういうのはいずれも伝統のある言い方、書き方を正しいとする例です。

ところで万事がこのように古いものを正しいとして割り切れれば簡単ですが、そうは行かないことがあります。古い日本語と言え、一番古いのは、『古事記』や『万葉集』の日本語です。

これで万事通すとなったら大変です。さしあたり、ラジオの天気予報など大騒ぎになる。「きょうは夕方から晴れてよい月夜になるでしょう」などと云えない。コヨイノツクヨアキラケクソ……。上品ですが、こんな調子では言えないことがたくさん出て来ます。天気のことばはまだ大丈夫です。が人間の体を表わす言葉などは困ります。日本人は昔から肉体に対してノンキで、単語をあまり発明しませんでした。クビといっても、アシといってもあいまいです。ことに体の中の部分、臓腑の一つ一つは固有の名前がほとんどありませんでした。「胃」とか「腸」とか「心臓」とか「肺」とかというのはみな字音で言っている。つまり古い中国語です。昔の日本人の中には、これが残念だというわけで、全部ヤマトコトバで言いかえようとした人があります。戦争中、野球の言葉ですが、ストライクというと敵国の言葉だからというわけで、ヨシとやったり、ボールというのをダメとやったりした、あの伝です。『類聚名義抄』という古い辞書の著者などは、そういう人だったようで、片端からヤマトコトバに置き換えました。胃はモノハミ。ものを消化する意味でしょう。「腸」はクソブクロとやりました。こういうのは、いくら古い日本語だからといって、いま使うわけにはいきませんね。

町かどで女性が二人出会いました。

あなた顔色が悪いわね。どうかしたの。

ありがとう。あたしこのごろクソブクロが悪いの。

などというのは実用になりません。

そういうわけで、古い由緒のある言い方を正しい日本語と考えようという行き方、これだけで全部がうまく説明しきれません。

三

権威づけられた言い方の中には、ただ古い伝統のある言い方というもののほかに、官庁とか学界とかそういう公けの機関で言う言い方、というものもあります。そういう風に公けに決められているからそういう言い方を正しい言い方と考えようとする行き方、これを正しい言い方を決める基準の〔1〕の(b)としましょう。

法律で財産を分けて「動産」というものと「不動産」というものにとします。家や土地は動かないから「不動産」で、タンスやピアノは動くから「動産」です。中には変なものがあって、東京の下町の方へ行くと、船の中に住んでいる家族があって、一家全部が船に乗って一日川をのぼったりくだったりしています。この家族がのっている船は動産か不動産かというと、これは家のようなものとして不動産になります。動くものだけでも、そう法律できまつているから仕方ありません。目黒や成田のお寺には本堂に不動さんという仏像があります。これは「不動さん」というから動かないかと思うと、もしお寺の坊さんが生活に困った場合、この不動さんを売り飛ばすことができます。そういうことから、この不動さんは、不動産ではない。動産です。こうなると、動く不動産があったり、不動産でない不動さんがあったり、なかなかやっかいですし、

かたがありません。

私はうかつで最近知りましたが、郵便局に行くと、通常郵便というのと、普通郵便というのがあるですね。われわれしろうとは、「普通」も「通常」も同じことじゃないかと思いますが、郵便局でははっきりちがいます。「普通郵便」というのは、書留とか速達とかよけいに切手をはって出すのではない郵便、それが普通郵便です。「通常郵便」というのは、目の不自由な人にあてて出す点字の郵便とか、農家で使う穀物のタネとかはやすい郵送料で送られる、そういうものに対して、特別の割引のない郵便、それが通常郵便です。したがって、わたしたちがふだん便箋に書いて、封筒に入れて十円切手を貼ってポストに入れる、あれの名前は、正式には、「普通通常郵便」という大変難しい名前になります。

一般に政府できめた名前には難しいものがたくさんあります。鉄道省には、小荷物、とか、手荷物、とかいう名前があります。駅へ持って行くと、荷物を目方で計ってから、「これは大きすぎるから小荷物にしてください」と言われる。今度は、小さい荷物をもって汽車に乗ろうとする時、「これは手荷物の扱いになります」と言って取り上げられてしまう。さっぱりわけがわからないようなことがあります。

古本屋さんという商売があります。梅崎春生さんが書いておられました。いつか古本屋さんへ電話をかけようとして職業別の電話帳を探したところ、古本屋という項目がありません。あとで人に聞いたら、古本屋というのは正式の名前でないので、公けの名前は「古書籍商」と

いう、舌を噛みそうな名前だったそうです。

屑屋さん、これも今では公式の名前は「資源回収員」だそうです。駅の赤帽は「手荷物運搬人」、郵便屋さん、あれは「郵便物集配人」とかいいうのだそうです。たしかに郵便を売って商売しているわけではありませんね。きょう新聞で「離島」ということを見ましたが、あれは私たちが離れ島と言っているものことですね、「離島振興政策」というと、私など島を離れる離れると勧める政策のように聞いてしまいます。

政府でできた言い方のほかに学界でできた言い方というものもあります。これも権威あるものとして一往通ります。お医者言葉には難しいものがあって有名でした。「歯」とは言わない。「歯牙」と書いてしがという。ムシバとも言いませんでした。ウシと言いました。私が中学校へ入学試験を受けるとき、身体検査があつて、耳の検査をしたお医者さんが何やら難しい字を書きました。取睨です。私はこんな難しい病気で入学試験に落第するかと青くなりました。家へ帰って、辞書を引いてみたら、御承知のとおり、これはミミクソのことでした。

体操の用語もなかなか難しいのがありました。カカトをあげてヒザを半ば曲げる運動、あれを私たちが小学校の時にはキョシヨーハンクツシツと言いました。私たちは先生の号令を聞きながら、半靴下がどうかしたのかと思つていたものです。いま、お医者さんのことばがどンドンやさしくなるように考へておられるようで、大変けっこうだと思ひます。

学者の中でも、植物学者などは耳に聞いてわかりやすい名前をたくさんつけたのでけっこうで

す。スマレに似て小さければコスミレ、白い花が咲けばシロバナスマレ、葉が円ければマルバスマレで大変ぐあいがよろしい。もつとも中にはヨーシユシロバナテンジクアサガオのような、バカ長いものがあって不便ですが、一般の人の生活にはあまり関係がないからまあいいでしょう。困るのは、一般の人の言い方とちがう場合です。

牧野富太郎博士といえ、かつての植物分類学の最高權威で、その人の植物図鑑はその方面で一番重んぜられたものです。いつか私はその本でツキミソウを探したところ、索引を見ても出てきません。これだけの本に出ていないはずはないがと思つて心あたりのところをバラバラ見ているたら、正しく我々がツキミソウと呼んでいる花が出て来ました。ところが名前はツキミソウではなくて、オオマツヨイグサと出ています。マツヨイグサという花があつて、その大きいものという事です。私たちはマツヨイグサ・ヨイマチグサ・ツキミソウ、みな同じものだと思つていたのが区別があるのに驚きました。そうしてそこを読んでみると、注意書きがあつて、

世上このものをツキミソウと呼ぶことあるは非なり。ツキミソウといふは白花を開く別品なり。

とある。これにまた驚きました。私たちはツキミソウという非な名前と呼んでいたのです。しかしあれに似て白い花の咲く草があるのでしようか。皆さん御存じですか。私はそれを読んでから長年気になっていましたが、それから二十年たち、終戦後国際キリスト教大学というところへ行つたところ、空き地の隅ではじめてお目にかかりました。それは正しく私たちのツキミソウに似ていますが、もっと小さく、貧弱な草で、白い花をつけている。それを見た時に、私ははじめて